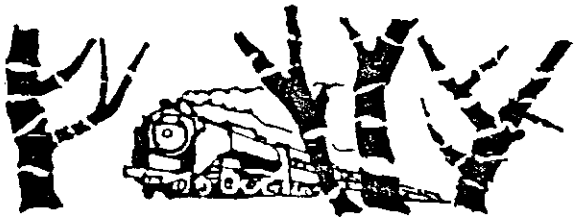
友　諒

（題字　石田喜助先生）



第２号によせて

友諒会会長　荻　野　修　作

昨年４月１日に停年退官された石田先生の御意志で友諒会誌が昨年９月15年振りに復刊されたわけですが，今回その復刊第２号が本年度の編集委員のみなさんのお力で発行されることになりましたのは，まことに御同慶の至りに堪えません。

高橋前友諒会長の"復刊のことば"にありました"２年生対象で将来の友諒会の隆昌の種をまきたい"という主旨は，今回の編集委員のみなさんのすばらしい企画 ── 友諒会諸先輩から原稿を頂戴して，これらを，紙面にちりばめるという企画 ── により十分に生かされていると思います。

此後とも復刊友諒が地道ではあるが，継続的な発展をし続けることを願いつつ，復刊第２号をお届けします。

本会の名称である「友諒」の由来について，下記文献の解釈を引用いたします。

論語　（吉川幸次郎編，新訂，中国古典選，朝日新聞社）

孔子曰，益者三友，損者三友，友直，友諒，友多聞，益矣，友便辟，友善柔，友便佞，損矣

孔子曰く，益者三友，損者三友，直きを友とし，諒を友とし，多聞を友とするは，益なり。便辟を友とし，善柔を友とし，便佞を友とするは，損なり。

「直き」とは，剛直な人物。「諒」とは，誠実な人物。「多聞」とは，博識な人物。「便辟」とは，むつかしいこと，いやなことを避けたがる便宜主義者。「善柔」とは，めざわりがよいだけの人間。「便佞」とは，口さきだけの便宜主義者。

先　輩　だ　よ　り

友諒は我心の支え

M 12　佐　田　敏　夫

米沢は私の出生の故郷であり，心のより処である。より処と言うのは昔を懐かしみその山川を愛し，友を想うと言うノスタルジァを言うのみではない。私を育成し，世に送り出して呉れた人生の基礎の凡てが実にこの米沢の地に凝集されていると言う意味である。家庭，近隣の躾，風習，風土興譲館中学，米沢高工と進んだ学窓，気概人生の価値感が私の中に形づくられた過程が今日の生活と仕事の中に尊い礎となり信念となって，常に私の心を支えているのである。それを何か端的に表現出来ないだろうかと思いめぐらして見るとき，上杉藩の訓えを根性にたゝき込んだ興譲館精神と人生の方向を導いて呉れた機械科の友諒会精神と言う抽象化され，昇華されたバックボーンがそれだと思うのである。寡聞にして恥かしいが，今度友諒会誌を復刊する熱意と労をとられた石田先生の文の中に「諒を友とし」の意味を知って，師弟友人，先後輩と年と共に数と重みと内容を増して行くこの「誠の心」のつどいに，これこそ我が心のより処であったのだと還暦を迎えて活眼の想いであった。世に出て既に四十余年，夢中に駆け足で通り過ごした我が国のかつて見ない激動期であったが，兎に角よくぞ対応して今日を迎えたものと思う。然し今からどうあるべきか一度立ち止まって反省し，将来を考える一つの転機である感が深い。今私は，桐生工業と言う会社の経営を預かっている。株主に応え，社会に貢献し，社員に生活の責任をもつと言うことは大変なことである。これは技術や学理の小手先技法だけで器用にこざかしく振舞ってすませることではない。信念と言う長く培った心の奥からの何物かを大切に全身全霊を傾けるべきライフワークなのである。これを考えるとき，あの昔，機械科の教室で始業の点呼をうける「秋葉，粟野，福田，舟見・・・・・渡部，吉田」の師の声が私の脳裏に声となってよみがえる。師，これらの友，この人達ならどう対処するであろうか，これらの仲間の為にも自分はどうあるべきか，今は亡き友の遺志にどう応え得るかとこれが友諒の心ではあるまいか。友諒の心を大切に，その重みの中に皆んなと共に勇気をもって進みたいと心に誓うのである。桐生工業株式会社は 1. 全員の人間性を尊び，その能力を生かす経営を進める。 2. 全員の自主参加を柱に，良品適価の企業競争に徹する。 3. 全員の信頼と協力を基に，時代適応の革新に努める。 これが私の友諒の心に基いて，私が示している我が社の社是である。　（桐生工業株式会社）

「でもしか先生」の断想

M 16　安　部　健　五

戦後，様々な新語が生れた中で，「でもしか先生」もその一つである。私は，この「でもしか先生」の一人である。終戦とともにその職を失った人，外地から復員しても職を得られなかった人などが続出し，社会や経済情勢がひどく荒廃して，混とんとした時期が続いた。その頃，我が国の学校教育制度が大巾に改革され，新制中学校・高等学校なるものが各地に発足して，多くの教員を必要とした。大学や高専出身者で職に就けずにいた人の中で，「先生でもしてみるか。」「先生ぐら

いしかできない。」と教壇に立つ人が出た。この言葉をもじり，更に低い給料などを皮肉って「でもしか先生」なる新語が出現したのである。一般的に，優秀な能力を持っていながら，やむなく教職に就いた人が多かったので，特に工業高校のレベルが上昇した。その意味で理工系出身の「でもしか先生」の戦後教育界に貢献した功績は実に大きなものがある。当然のことながら，今でも東北各県の工業高校で活躍されている先生の中に，旧米沢高工・工専卒業の方が非常に多い。たまさか一堂に会する時などは，あれこれとその時代を偲び，古き米沢のよさをなつかしんでいる。「でもしか先生」談義に関連してのことだが，この3月の半ばの頃であったろうか。私の知人（私の勤務している青森工業高校同窓会役員）のご子息で大学院在学のS君が，米沢のデパートで求めたというお菓子を携えて，「先輩，遊びに参りました。」とひょっこり訪ねて来てくれた。お土産は川西町小松の老舗錦屋の銘菓であった。私自身，川西町に生れ育ったことから，殊の外嬉しくそのご芳志に感謝した次第であった。S君のことについてはお父さんからかねがねお聞きしていたが，ご本人との出あいは始めてのことである。失礼な言い方ではあるが，青森育ちにしては，歯切れもよく，若々しさについ引き込まれて，時を忘れるほど楽しいひとときを過しだ。S君は将来技術畑で活躍してみたいと話していた。暫くたって7月頃，S君のお父さんがお出でになって，「息子は先生とお会いしてから考えを変えたようで，工業高校の先生になりたいと言っている。若しこのことが確定したら，よろしくご指導の程を。」というごあいさつを受けた。大学院まで進んで，高校教師とは勿体ないと思いながら，一方では，屈託のない健康的な好青年の若い教師像を頭に画いた私であった。つい先立っての夜9時頃，このS君のことについて，井上和夫先生から次の要旨のお電話を戴いたのである。「S君の教員採用の見通しはどうなっているだろうか。まあよろしく。」続いて「友諒会誌を昨年から復刊したので，古い先輩として寄稿されたい。期限は今月末だから。」。S君のことについては最善をつくす心づもりでいたけれど，原稿まとめは私の最も苦手とするところ一瞬ためらったものの他ならぬ同級生の井上先生のこと，お断りするような巧い言葉の出ないまゝついついお引受けする羽目となり，目下悪戦苦闘中というところである。然し，「友諒会」なるものは，郷愁に似た思いを私の心にかき立ててくれる。旧校舎や製図室を始めとして，数多くの実験室それに丈余の大煙突・ポプラ並木・斜平の山・米坂線など走馬燈のようにその頃の姿が，頭の中をかけめぐる。それにも増して，「そもそも高工のキカイ科はキカイ科は・・・」の応援歌の中に木村科長先生や石田先生・熊倉先生（当時の？）そして同級生の顔々々。「俺は米沢高工生，しかも機械科だあ。」と誇りたいものが，この「友諒会」の中にあったと私は今でも信じている。私の卒業は昭和16年12月28日だから，もう36年も前のことになる。卒業の日に，「楽しき時も，幸わいの日も，春の水の如くほど走り過ぎぬ。」と書き寄せてくれた人の言葉そのままである。卒業直前の12月8日に，日本は米英両国を相手に戦いを宣した。その日，機械科の大煙突のてっぺんに日の丸の旗を結びつけたことなどを今でもさだかに覚えている。その煙突をよじ登った級友の中に，間もなく戦いの場で若き命を断った人もいる。繰り上げ卒業や大講堂で徴兵検査を受けたのも，私達が最初のことであったろう。悪夢のような太平洋戦争とは言いながら，私達当時の若き学徒にとっては，ひたむきな青春の日々であった。思えば遠い昔のことになって了ったものである。

「友諒会再興万才。」，「友諒会誌復刊お目でとう。」

（青森工業高等学校）

新入社員時代

S45　本多克司

私が現在の会社に入社したのは昭和四十五年四月一日です。もう早いもので満七年になりました。世の中は景気が良い時で，私が入社した年は特に人手不足でした。そのために企業の人事課の人たちが前の年の秋に早い者勝ちの様に大学を訪問したものです。私たちは昭和二十二年～二十三年生まれですから，戦後では一番人間が多い時にも拘わらず就職出来ない生徒は皆無で半数以上の人は自分で選んだ会社に入社出来た様です。

そんな時代に就職出来た私ですから，入社してからも割と憶する事もなくマイペースで新入社員時代を過したと思っています。先ず，私にとって就職は会社で入社させたと言うよりも自分が入社してあげたと言う気持が強かったものですから，専ら仕事をおぼえるよりも給料が安いとか，仕事が疲れるとか，人間関係がうまくいかないとかいう愚知をこぼす時が多かった様に思います。そのためか，毎日の様に夜になるとネオンの中に消えて行き，大分二日酔で会社に行った時もありました。しかし，うまい事に新入社員の給料では長くは続きません。そのために1ケ月の半分は寮で静かに寝ていなければなりませんでした。

半年後になると，ようやく自分の会社で何をやっているかがわかって，だんだん仕事もおぼえて社会人として生きている自分の姿が把握できる様になりました。又私たちの課内は人手不足で，実習的な仕事でなく，実戦的な仕事をすぐに与えられた事もあり，仕事に対する興味もわいて来ました。今，考えてみると，その頃から一年～二年が最も充実していた様に考えられます。それからは二年～三年をくぎりとして新しい仕事に取組んでいますが，いつも新入社員の時の心にもどるためにも，一年は"遊び"一年は"実行"一年は"仕上"というリズムを大事にしようと考えています。

（東京電気化学工業株式会社）

合宿ゼミ

合宿ゼミに参加して

S2年　高橋和幸

合宿ゼミに参加して本当に良かったと思っている。合宿ゼミと言うことで，何か相当堅苦しいものになるんではないかと思い，あまり乗り気ではなかったんだけれども，実際参加してみると，そのような心配は全く無用であった。日中の山に登って眺める景色もすばらしかったし，食事時の懇談とか，ファイアーを囲んでの集いなども，とても楽しいものであり，そこで見る先生方の姿には日頃教壇で見る姿からは想像もされないような一面もあったりして，日頃とは違った面を見ることが出来ておもしろいものだった。

夜は，夜通しジャラジャラやっている者もいたが，我々のように出来ない者は部屋でゴロゴロしながら，何とはなしに朝まで話し込んでしまった。とりとめもなく交す会話は，日常とはちょっと違った雰囲気の中で，自分を隠さずにさらけ出すことが出来て有意義なものだった。本当に参加して良かったと思っている。

合宿ゼミに参加して

S2年　井　上　利　春

雪の名所，スキーのメッカである山形にも春が訪れ，街も桜でうまり，米沢ではその，人の心が雪から解放された喜びの頂点にある時期に上杉祭りが催された。私達大学2年生には，この祭りを初めて見たという人も多かったことだろう。古式豊かな火縄銃の発砲風景，上杉・武田両軍の戦国絵巻など，印象深いものであった。

そんな大々的な祭りも終わり，夏の日ざしもさそうかという5月も末の30，31日の両日，機械系の合宿ゼミが行なわれた。合宿ゼミについては，生輩から，「酒も，食べ物も沢山だし，おもしろいこと限りなし。」と伝え聞いていたものだから，参加希望者を募ったときは一も二もなく手を上げてしまった。頭の中には，生活費が少し浮くな，などというささいな考えもあったのだが。

さて当日は，早く手をあげてしまったこともあり，第1班の班長に選ばれたので，8時15分に本館前に集合で人数確認，そしてそれぞれバスに分乗出発となった。

天元台について荷物をロッヂに預けた後，我班つきそいの鈴木先生と相談した結果天元台に登ることになった。リフトを乗りつぎ，第3リフトを降りた時，私は心から失敗したと思った。ズックばきだった。山はまだ雪だらけで，裸足にズックのみという，あわれな格好で，なかばやけになって歩いた。こんな状態だったから，上についての昼食はうまいことはうまかったが，帰る時間を気にするようなだらしなさだった。「もう少し歩かないか。」という先生の言葉を，顔で残念がりながら断わったのも仕様がなかった。中学生・高校生の時代であれば，無理してでも，「行きましょう。喜んで。」と答えたはずなのに。

こうして山から帰り，自然に集まるのは4人ずつ，麻雀である。夕食まで時間があるからと言えばやるのはこれ。私達の班は私が牌をもってゆき鈴木先生を交えての大会である。大学の先生といえやはり人の子，大学時代に何を学んで来たかはわかろうと言うものである。

夕食の時間は酒も入っているので，歌に踊りに自己紹介に，楽しさあふれるものであった。私などは先生につがれる酒のうまさが胸にしみて感動のあまり吐きそうであった。

それからは風呂の時間も惜んでの麻雀である。朝日が出るまでやった。これがもとで朝食に間に合わなかったのは我班のみ。この汚点は反省だけで消せないものだった。

帰りになると，他の班の人がゴンドラに目もくれずに歩いていくのに，我班はゴンドラの時刻を調べる始末。合宿ゼミの意義は機械系の先生と学生の交流と思うが，これは確実に実を結んだと思う。しかし，これ程疲労が伴うとは思わなかったというのが実感である。

合宿ゼミ（五色温泉―宗川旅館）

短M1年　在　木　聖　君

去る9月3日～4日に恒例の合宿ゼミが行なわれた。3日（土曜日）は午前10時に米沢駅集合。この時間に我が機械科数名が早々に遅刻し，出発前に先生（仮名で松野先生とでもしておこう）の雷が落ちた。まるで僕達の前途を暗示でもするかのように。

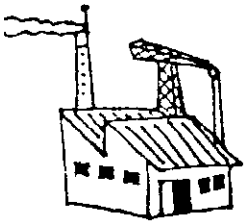
改札口を1歩踏み出すと先生方も僕達も，数秒前のことはスッカリ忘れ，心うきうき列車に乗っ

た。目的駅に着くまで，車内で各自持参のにぎり飯や弁当を食べたり，友人の食料をあさっているうちに早くも駅に着いてしまった。多勢の男女（と言うより「男」と言った方が適切）がドッと押し寄せた改札口は，まるで芋を洗っているようである。そのせいか外の空気は，味でも付いているかのようにおいしかった。便所近くで「空気がうまい」などと言っている者さえいた。旅館までは，ハイキングコースというか，第二の八甲田コースともいうべき山道を徒歩で向った。2時間以上もの道程は苦痛や疲労ばかりでなく，豊富な話題を提供してくれた。中でも特に女性の話に花が咲き意気揚々としていたが，現実を見つめるとむなしいものだった。機械科とはこんな運命なのか，天は我が科を見放したのか。悪戦苦闘の末，広大な自然を庭に持つ旅館を目前にして，幸か不幸かポツラポツラと雨が降りだしてきた。米沢駅での先生の雷は，この雨を暗示していたのだと信じて疑わなかった。

雨で濡れたズボンやパンツを乾かし，時を過した後，大部屋に集まって山形新聞社の方にマスコミ人らしい情報豊かな話を，首を上下にさせながらお聞きした。1つ1つ話を示せないが，何かを得たことは確かである。この後は合宿ゼミでのメインとも言える晩餐会の時間である。

唯一の楽しみであるそれは，先生方と共に酒をくみかわし，面識すらなかった人と共に，若者は青春を先生方は過ぎ去りし青春期及び壮年を謳歌し，奇酒珍聞に酔った。さかながよかったのか，酒はスピードを上げて体内を駆けめぐっていた。その時，スーッと白い女性の手が僕の杯に伸びてきた。僕は全身が地の底から突き上げられるような動悸を覚えた。杯を持った手はにわかに震え，目はうるみ注がれる酒をじっと見ていた。「どうも」としどろもどろに答えた後，一目拝見するため首を上げようとしたが動かない。仕方がないので通り過ぎるスラックスと伸びた大根足を見送った。僕は瞼に美女を映しながら杯を明けた（これで良かったのだ。）各科及先生方の出し物を見聞している間に時は過ぎ，各自二次会を求めて散っていった。嵐は去ったことにしておこう。

部屋に戻った僕らは先生との懇談。話のあちこちで年の甲とも言うべきものを感じ別世界を見たような気がした。このようにして長月の一夜を過ごし，帰宅の朝を迎えた。考えれば疲労の2日ともなるが，できれば，過ぎ去りし合宿の日々をもう一度。栄光ある機械科のために。



工 場 見 学

工場見学を通して

M3年　小沢田　正

今回の工場見学は，最初の二日間で日立市にある日立電線並びに日立製作所を見学した。多くの先輩の方々が要職について活躍しておられ，私達工場見学に行った学生をあたたかく迎えてくださった。先輩の方々を通して大学では得られない多くのことを学ぶことができたことは，工場見学ならではのものだったと思う。

電気関係のことはよくわからないので，日立電線では，おもに電線を製造する機械が，私達機械系の学生の興味を引いた。電線の種類が多いことには驚かされた。電子機器用の髪より細い線から海底ケーブル用の太い線まで色々あるし，また電線の被覆の仕方も多種多様に渡っている。風によって振動を起したり，音を発生したりしないものまた雪がつきにくいものなども開発研究しているということだ。電線メーカーは不況の影響が大き

いと聞いていたが，日立電線は今回の工場見学で最も気迫の感じられた工場であったと思う。

日立製作所では，洗濯機・クリーナー・モーターなどの家電関係の工場，タービン・発電機・変圧器・しゃ断器などの大物機械の工場，そして配電盤・制御装置・計算機などの工場を見学させてもらった。どの工場でも，コンピューターを利用することと，人員をできるだけ少なくするということに努力しているようだった。これからの機械メーカーの傾向であると思われる。

私達学生は，とかくすると理論だけに終始しがちであるが，実際に工場を見て，苦労話などを聞くと，一つの製品を設計し，それを製造・販売するということは，本当にあらゆる学問の集大成であると言っても過言ではないように思わされた。また，そういう意味で，エンジニアとして，あるものを設計する場合には，その中に自分の一つ一つの生活経験が生きてくるものなので，普段の生活はおろそかにできないということを思い知らされた。

さて，今回の工場見学で示されたもう一つの点は，日本の工業のこれからの展望である。このことは，私達エンジニアを志す者にとって非常に興味深い，そしてまた重要な問題だと思う。大企業では，もはや国内販売だけで依存できなくなっている。また，昨今は，先進諸外国への輸出もかなり制限を加えられて来ている。したがって，日本はこれまで以上に，アジア・アフリカの国々と密接な関係を持つようになると思われる。そういう意味で，私達は，これらの国々に対する正しい理解と認識を持たなければならないと思う。

技術面，物質面では，今や世界の先進国の一つに数えられるようになった日本。しかし，精神面人道主義の面でも，世界に認められるように，私達エンジニアも努力しなければならないと思う。

最後に，私達学生の工場見学のために労して下さった先生方，先輩の方々に心から感謝の意を表したい。

工場見学感想（東京）

M3年　竹　川　昌　宏

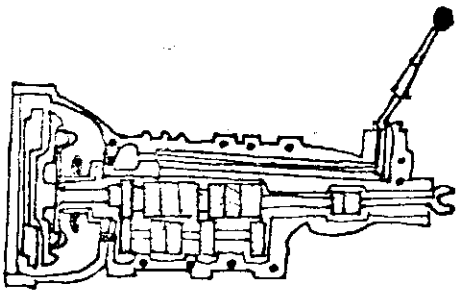
10月5日6日の両日，我々機械及び精密工学科3年は東京で日本鋼管京浜製鉄所と日産自動車村山工場を見学した。見学の二日間，好天に恵まれ暑いとさえ思われた位であった。

5日，日本鋼管を見学する。川崎にある京浜製鉄所は海上に扇島という大埋立地を作り，そこへの各工程の移転が進められていた。我々が見学したのは，この扇島であった。まずその広さに驚かされた。バスで日本鋼管自らが建設したという海底トンネルをくぐり，扇島（550万㎡の広さをもつ）へ出る。一つの製鉄会社の中を走るというよりは臨海工業地帯を走るという感じだ。道の両側には植樹もなされ，緑化にも心が配られていた。

さて，いよいよ各工程の見学である。原料ヤードから高炉，転炉とまわる。転炉へ酸素を送り込むのにコンピューター制御がなされているそうだ。各部所につく人は少ない。せいぜい15名位である。ここから熱延工場へ向う。天井に設けられた巨大なクレーンが印象的である。熱延工場では，あいにく作業が行なわれておらず，黄色く輝き赤い光を発しながらいくつものローラーの上をすべってゆく鉄の板が見られなかったのが残念である。今見学の本命とも言うべき鋼管作製工場を見学出来なかったのがまことに遺憾であった。満たされぬ心持ちで扇島を後にするのは筆者の工場見学に対する未熟さのせいのみであろうか。

翌6日，日産自動車村山工場を見学する。ここは，スカイライン・ローレル・フォークリフト

（１ｔ～35ｔ）の国内，国外向けのアセンブリィ工場である。すぐ脇にはすばらしいテニスコートもある。



ここでは車体工場，圧造工場，組立工場をそれぞれ見学する。各工場とも，６ｍ位の間隔で一列にラインがしかれ次第にその目的物の形を呈してゆくのがわかる。スポット溶接などは部品をその機械にはめ込んでやりさえすれば一度にいくつもの点で溶接がなされるようになっている。一部ではその部品はめ込みすら機械で行なわれていた。各スポットの溶接やボルト・ナットの締まり工合は人の手によって厳重にチェックされている。その流れ作業からは一種の確実性を感じさせられる。たいてい一つの仕事を二人で作業しているようであった。安全性や欠勤した時への配慮であろうか又，人と機械の一体化がなされているという印象を受けた。

この２日間の工場見学で，共通して感じられたことは，その省力化，合理化ということである。各工程の配置などはその最たるもので，直線的でムダがない。又，次に来たるべき事に備えて着々とその準備にとりかかっているのには感心させられた。

今回の工場見学を終えて筆者が思うに，同業種の工場を見学しても面白かったと思う。Ａ社とＢ社を見学比較してその工程でのノウハウを考えてみるのもよいことではないだろうか。

工場見学を振り返って

短Ｍ2年　稲　葉　　清

10月３日から６日までの４日間に渡る工場見学において私達自身の目でじかに見，現場で働いている人達の話を聞くことができたことは，学校での講義とも違った角度から学ぶことができ，大いに得るべきところがあったように思われます。

私達は，初日は黒磯のミツヤ送風機，２日は千葉の川崎製鉄，３日は藤沢のいすゞ自動車，４日は羽田の日本航空機体工場というコースで各工場を見学しました。実際に見学してみて，各工場に共通して感じたことでしたが，そのいずれの工場も規模の大きさ，システム化，工場に使用されている特殊な機械，技術，また，合理化対策，公害対策等々には，つくづく驚かずにはいられないものでした。そして，その工場を築きあげたのも，その工場を動かしているのも技術者なのだという事実をまの当りに感じ，大学において技術者になるために学んでいる私達にとっては，なんとも言えない気持ちを味わわずにはいられませんでした。各工場で設けられた質問の時間の際には，最初こそ緊張していたせいかみんな遠慮がちでしたが，２日，３日と経るにしたがって活発になり，時間の関係上，各自の質問を言い終らないうちに帰らなければならないような事もあり，この事は今思ってみても残念なことでした。

私達が訪れたいずれの工場でも快よく迎えてくだされ，ていねいに工場内を案内していたゞきました。中でも私達の先輩の多く働いておられるミツヤ送風機では，マイクロバスでの送迎，那須高原へドライブにつれていってもらったりしたうえ昼食などにも気を使っていたゞき，つくづく先輩

は有難いものだと思いました。
又，工場見学第3日目10月6日には後楽園飯店において友諒会総会に引続き私達の歓迎会を催していたゞきました。私達学生とは違って実社会の第一線で活躍しておいでの先輩の方々とテーブルを囲んで気軽に話が弾み，最近の就職状況や学校の話題，さまざまな忠告などもしていたゞき，実に楽しい思い出となりました。

4日間での工場見学や先輩の方々のお話をじかに聞くことができたことにより，はっきりしないまでも一年後に直面する就職という問題に対して各個人がそれぞれ自分の考えを持つことができたように思います。

最後に，この4日間の工場見学の準備や引率してくださいました諸先生方や，私達を快よく迎えてくだされ，さらに有意義な工場見学にしてくださいました各工場での先輩方や，友諒会での多くの先輩方々に，深く感謝いたします。

雑　　感

当世山大生気質に物申す
― 後輩に一言 ―

M4年　清　野　　稔

先輩として？何を書けるってんだい。先輩らしいこともしてねェ俺なのに。白々しくて何も言えねェよ。でも，仕様がねェ。一応先輩だ。格好悪いが，自戒の意味も込めて，おまえ等後輩に物申す。「テメエ等一体何やってんだ。大学生で御座いなんて言って，無駄に休暇（大学生活）送るんじゃねェ。勉学に勤しむも結構。女の尻を追っかけるも結構。ニーチェやデカルト気分も結構。学生運動？結構。でもな，気取るんじゃねェ。俺達お互い何も持っちゃいねェんだ。服の下は骨と皮これから肉付けすんのに服だけタキシードはねェ。俺達は，まだまだボロ服で充分よ。」
もうひとつ。「東北人の（否，日本人のかな？）悪い癖は出すな。顔は下向けて眼だけ上眼使いの気元取りするなんざまだ早い。言いてェ事があったら，相手の眼をじっとニラミ返して言え。間違ってたっていい。腹が立ったら，それを思切り先輩にぶち当てゝみろ。同輩だっていい。うじうじしてたって始まらねェんだ。友愛なんてェのは，思切りぶち当ることから生まれるんじゃねェのか。

さらにもうひとつ。「お利口さんばっかりじゃ面白くねェ。馬鹿な野郎のひとりやふたりは，いたっていい。良きにつけ悪しきにつけ，枠を越えた馬鹿野郎がいねェってことは，どいつもこいつも団栗の背比べだってこった。人の尻を追っかけてく時代はもうとっくに過ぎてんだ。子供じゃねェんだ。何べんも失敗したっていい，一度だけ成功すりゃ，それでいいじゃねェか。馬鹿でいい。自分から進んでやってみろ。何でも良い。自分からやるこった。」

～活字になるというので喜んで書いた哀れな男より～

僕の学生生活

S4年　原　田　満　雄

私が2年生になって米沢に来た時に，4年生の先輩が2人おりました。その頃，私もまだ若くて一応，大学という所は，毎日，学校へ行き，勉強研究するものだと思っていました。しかし，半年もする間に，いろいろ先輩を観察しておりますと（私の先輩に関しては），大分暇そうで，4年生

は一体何をする人ぞと思われました。そんなつまらんことを考えながら，2年，3年と忙しい日々を過ごし，怠惰な学生生活も身につけ，麻雀も覚え，立派に（？）4年生になってしまいました。この間に，私は知りました。4年生の優雅な生活は，2・3年生の時，いかに努力したかによって決まること。そして，勉学よりも，この多感な若き時代を有意義に過ごす重要性を。自分の意志でやりたい事をやれるだけやってみるべきであることを。

大学時代，私が大きな影響を受けたのは，先ずアルバイトです。全然知らない人達に混じって仕事をし，特に長期のバイトでは，会社の人と友達になり，多くの人間関係を学びました。これは学内では，殆んど学べないものです。そして，これは，将来，実社会に入ってから大いに役立つものと思われます。ついでに，アルバイト料がたまったら，生活費は必要ですが，ステレオなんて買わないで，一人旅もいいと思います。

私は，米沢に来てからは，何のサークルにも所属しておらず，余暇があり過ぎました。今さらながら，サークルに入っていればよかったと思っております。しかし，その分，私には一人だけの膨大な時間があり，のんびりもしましたし，多くのことを自由に考える機会がありました。もっと自分を大切にしようと。物を自由に見て考えるべきだと思いました。自分に自信をもち，信頼し，他人の言動に左右されてはいけない。自分で納得のいくように考えなければならないと。といっても片寄っていては，自由ではないから，幅広い考え方，見方を身につけようと。自分を大切にして，といって排他的じゃなく，多勢に感わされない自覚を持った個人々々が，一致団結というより協調するのだと考えました。とりとめのない話になりまして，こんなことばかり考えていると狂ってしまうので，あまり考えない事にしておりますが，それでは毎日が退屈でしょうがない。何もしないでゴロゴロしていると増々何もやる気がなくなるものらしいのです。そこで，この無気力解決策として，私は，ランニングをしました。不思議とこれが有効でして，運動したあとは，部屋に帰っても，疲れるというよりは，むしろ逆に，体が勝手に動き出し，それまでの倦怠感など忘れてしまいます。精神的にもひきしまり，早朝ランニングした日は，本当に一日中，調子がいいものです。怠惰な生活にうんざりしている人に，適度の運動をお勧め致します。

最後に，私は，精密工学科に入って幸せでした。2年生でも3年生でも，先生のところへ顔を出してみるといい。そこには，精密ファミリーが待ってます。質問なんか持っていかずに，お茶のみに行くのです。先輩がお茶を入れてくれるし，多くのタメになる話が聞けるのです。何といっても10月の白布マラソン。これに参加せずして，精密の学生に非ず。白布の風呂とバナナとビール。

精密大運動会。「芋くれ，芋ー。」

今の2年生は，私達4年生を，どう見たでしょうね。

大学生活からの体得

M大学院2年　佐藤英雄

大学に入学してから早いものでもう六年目である。機械的なものが好きであり，そのことが入学の一理由となって機械工学を学び始め現在に至っている。機械的なものといっても材料関係より，メカ，即ち，機構的なものの方に興味がある。大学では，機械工学の様々な分野の基礎知識とその応用への入口附近までの講義がある訳だが，それをすべて覚えようなんてしたら大へんな難事業で

ある。そこで，いろんな事を考えていくうちに，どの分野においても，その問題に対する基本的なものの考え方があることに気づいていく。このことがわかると，現実の物理的モデルを数学的に記述しそれを数学の華麗な技を拝借して解き，目的を達することができるようになる。学部の専門課程に移った当初は，そんなことには全然気づかなかったが，大学生活も4年目位になるとどういう因果か知らないが，わかりかけてくるのである。この事は，当然のことかも知れないが，大学へ入って会得できた貴重なものであると同時に，この基本的な物の考え方こそが，将来，社会に巣立って行ったときに各々の分野での問題に対処できる下地を築いたことになるのではないかと思う。

また，大学時代の読書から得たものも大きい。僕の場合，歴史ものから多くの事を得ている。たとえば，司馬遼太郎の「歳月」である。司馬氏の他の作品も読んだが，これが特に印象深い。というのも，江戸末期から明治初期の激動期に江藤新平の見事な振舞いに魅せられたからであり，また無名の彼が大志を抱き，それに向かって行く様は形容し難いからでもある。こういう人間の人生は様々な事を教えてくれ，そして活力さえも与えてくれる。だからこそ，この大学時代の読書が，貴重なものとなるのではないだろうか。

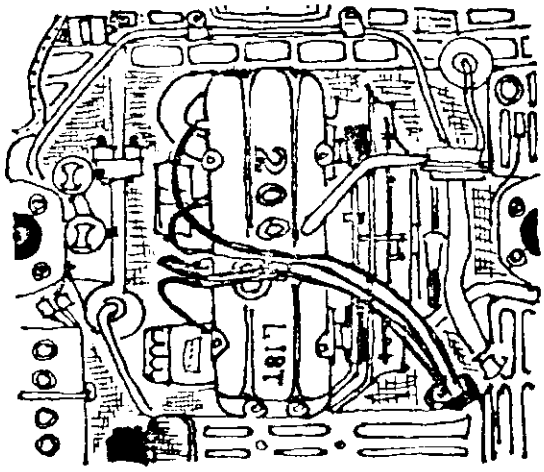
秋

S大学院2年　佐藤健夫

山々が赤く色づき，いよいよ本格的な秋の訪れです。食欲の秋とか，読書の秋というのは俗世間の話。来春卒業をひかえた，4年生と私達大学院の2年生にとっては，就職試験が行なわれる恐怖の秋なのです。

そもそも就職試験が恐ろしいと感じられるようになったのは，いつの頃からでしょうか。私が4年前米沢に来たときは，世の中が景気の良い時で就職難などというのは，どこか他の世界のことで逆に求人難で，大学生はひっぱりだこでした。大学の先輩方もこと就職に関しては楽観的で，ゆうゆう自適の大学生活をしている感じがありました。ところが，私達が4年になろうという時期に，一大ハプニングが起りました。そうですオイルショックです。そのため私達がいざ就職を決めようという段になってみると，不況のため採用中止とか採用人数の削減という企業が続出して，以前とは全く異った状態となりました。そしてこの状態が現在まで続いている訳です。採用人数のわくをせばめたので，それまで入社試験は採るためのものだったのが，会社に必要な人材だけを選び出す落す試験となったので，私達に恐怖を与えるようになったような気がします。今後もこの傾向は当分変わりそうもありません。それであくまで私の理想なのですが，今後就職試験を受けるようになる2・3年生に，次のその1・その2の実行を勧めます。その1，3年までは，単位を落とすことのない範囲で大いに遊ぶのが良いでしょう。クラブ活動，マージャン，パチンコ，飲酒，恋愛，とにかく経験できることは何でもやってみるという心構えで，見識を広く持つように努力すべきです。その2，4年になったら，やはり勉強をすべきでしょう。大学に入ったのは何といっても勉強するためなのですから。卒研室に配属になったら，卒研のテーマを早く先生に与えてもらい，それを一生懸命やるのがいいのです。一つの研究をするには，そのことに関する知識さえあればいいというものではありません。関連した分野の知識が必ず必要となります。たとえば鋼の熱処理による機械的変化に関する研究をする事になったとします。金属学の知識は不可欠ですが，その他にねじり試

験や引張試験を行なうときには，材力を知っていなければいけません。ひずみを求めるのにストレィンゲージを用いたとすると，電気の知識も必要です。卒研と真剣にとり組もうとしたら，3年までに習ったことをもう一度復習して，活用できるようにしなければとてもできません。そして，こうして得られた知識とか実験に臨む態度とかは，何ものにもかえがたいもので，将来どれだけ役に立つかわかりません。また就職試験の難関もみごと突破させてくれるでしょう。



就職状況一覧（昭和51年度卒）

【機械工学科】

小山　近	図書印刷
菅原茂美	黒崎築炉
村上秀幸	東北パイオニア
田中一也	世紀工業
深瀬　弘	山形市役所
阿部　淳	協三工業
青木英雄	日野自動車工業
荒木　卓	バンビ
荒谷雄二	立山アルミニューム工業
伊藤直哉	日本サーボ
井上　隆	日本酸素
石井良一	三ツ葉電機製作所
稲葉　昭	
小倉昭一	日本電気
小野塚克己	東洋熱工業
尾形　仁	日立製作所
大越洋一	日立エンジニアリング
加藤　彰	日立サービスエンジニアリング
門崎秀夫	鶴岡市役所
川島雅人	富士通
河合克昌	日本電装
栗山　尚	本州製紙
小関忠雄	東芝セラミックス
小森　明	倉敷機械
佐々木道徳	西牧工業
佐藤良晴	新中央工業
志布高一	いすゞ自動車
柴野芳直	新潟コンバーター
鈴木忠明	日立電子エンジニアリング
染田直彦	柿本商会
高橋一広	富士通機電
中山正道	協三工業
仲沢祐喜	日立工機
成田和弘	不二精工
本間英一	ハッピーミシン製造
三浦　弘	曙ブレーキ工業
矢野雅之	石川島プラント
山中　馨	
吉川忠男	佐藤造機
脇阪恭明	板谷製作所
渡辺邦裕	トヨタ自動車工業
多嘉良茂人	萬自動車工業

小野繁樹	トーヨーカネツ	佐々木晴彦	進学（山形大・大学院）
大橋誠也	北越工業	佐藤公哉	〃（　〃　）
安和　広	沖縄へ	田代祐一	〃（　〃　）
安部公平	一正蒲鉾	南野嘉也	〃（　〃　）
今泉　栄	進学（山形大・大学院）	横山　隆	〃（　〃　）
河原　輝	〃（　〃　）	大津　清	〃（東北大・大学院）

【大学院　機械工学専攻】

会田英生	日立製作所	佐藤　孝	山水電気
山山　裕	帝人	佐藤義雄	酒田工業高校
梅森　収	東京芝浦電気	真田芳直	東芝エンジニアリング
片平芳博	呉羽化学工業	千葉幸憲	日本鋼管
佐々木恭悦	日本楽器製造		

【精密工学科】

梅津芳弘	日産自動車	菅原金一	自営（農業）
鈴木　努	山形電鋼	鈴木信一	太平工業
浅野盛夫	アルプス電気	鈴木太賀夫	佐藤造機
池ケ谷裕彦	ヤマハ車体工業	鈴木伸義	東北精機
石川　悟	北陸工業	瀬川光一	吉田工業
石田良夫	浜井産業	高田和幸	東京鍛工所
大河原謙一	進学（山形大・大学院）	高橋真一	進学（山形大・大学院）
中田　寛	ハッピーミシン製造	高橋文一	田村電機製作所
蒲生純一	小島バルブ工業	竹下輝政	三協アルミニューム工業
萱場邦彦	ミツヤ送風機製作所	竹田信介	弥満和精機工業
菅野隆裕	芙蓉防災工業	武田　譲	東京プラスチックレンズ
栗城伝志	富士通	千葉直樹	東北沖電気
小南敏弘	北芝電機	富永孝文	進学（山形大・大学院）
郷　正	ＮＢＣ計算センター	長沢一雄	二国機械工業
紺野光雄	総合設備計画	檜山裕二郎	東日本ディックライト
佐々木敏信	ローレルバンクマシン	福士正行	加藤製作所
三瓶秀彦	進学（山形大・大学院）	村越哲雄	林精器製造
島貫静雄	ナカ工業	茂木俊昭	田中計器工業
菅井信行	明電通信工業	森　優	牧野フライス製作所

森谷政好	大久保歯車工業
八重樫　優	進学（山形大・大学院）
山崎和治	松下電器産業
山本義則	日本電気
渡辺和則	ミツヤ送風機製作所
林　克郎	石川製作所
上中　泉	ナイルス部品
奥井洋文	バンビ
皆川岳志	日本ジーローター
千葉真人	東日本ディックライト
早坂　学	盛秋丸
大木哲夫	板屋製作所
小島　博	ミクロン精密

【大学院　精密工学専攻】

遠藤勝明	富士通
田福彰三	日本無線
橋本史朗	富士写真光機
三浦慎也	日立製作所
村上忠弘	東北リコー

【短大機械工学科】

安部正晴	専攻科
伊藤松雄	専攻科
一色輝男	自営
遠藤正美	ハッピーミシン
小山啓市	吉野工業所
大橋栄市	山形大学工学部職員
門脇和明	ミツヤ送風機製作所
菅　昭	山形三菱自動車販売
小関好美	米沢日石
今　美紀夫	東芝セラミックス
佐竹忠昭	山形大学工学部職員
菅原英昭	三陸ファイバーグラス
鈴木勝人	山形大学工学部職員
鈴木吉郎	東日本ハウス
鈴木健一	米沢製作所
高内　博	高三電化
豊野宏司	ハイメカ工機
舟山義弘	国鉄
松木　正	日産チェリー山形販売
松田康男	太陽工業
皆川久志	嶋田チャンネル
我妻利広	中央設備工業
大場　稔	協同通信工業
小庾光雄	
色摩和雄	県警
野月昭司	佐々木農機

編集後記

先輩から後輩への助言をお願いしましたところ，多くの方々から絶大な御協力をいたゞきました。さらに，今回は御都合のつかなかった先輩からも，次の機会にという御連絡をいたゞいております。編集委員として，諸先輩に心から感謝いたします。

友諒会報　復刊第2号

発行日：昭和52年10月（非売品）
発行責任者：荻野修作
編集委員：近　久満雄・山口たい子
上原武幸・塩野　功
植松整